

# 趙宋天台学の背景

## ——延寿教学の再評価——

池田魯参

### 一 はじめに

永明延寿（九〇四～九七五）の教学のなかで天台学がどのような契機をもつのか、と問うことは、次のような二つの基本課題を闡明するであろう。

第一は、延寿の著述のなかで頻繁に引用されている天台教義が、果たして延寿にとってどのような意義をもつものとして読まれたのか、という点である。

第二は、延寿の教学における天台学の実態を究明することによって、これまでほとんど不明であり、また不問のままに残されていた、趙宋天台学の成立背景がどのような形のものであったのか、という問題が、相当に明確になるだろうという点である。

一般に、趙宋天台学の振興は、『仏祖統紀』（二二六九）巻一〇所載の諦観伝などに伝えられるところによって、呉越国王

錢淑が『永嘉集』を覽ていた因みに、「同除四住」と出る文の意味が解らず、天台徳韶（八九一～九七二）に問い質したところ、徳韶はそれは螺溪義寂（九一九～九八七）にたずねる方がふさわしいとして義寂を紹介した、義寂の言を聞いて、王は、この時、海外に流散した典籍を日本や朝鮮に探索することを決意し、かくして将来された教籍の研究によって、天台数学も鬱然として抬頭したのであると考えられている。

ところが、天台徳韶や螺溪義寂についてはわずかな伝記資料が伝えられるだけで、彼等の教学についてはほとんど何も解らないのが現状である。そのためもあって、これまでは四明知礼（九六〇—一〇二八）に代表される趙宋天台学の成立をうながした教理史的背景については、山家山外派の抗争として伝えられるほかはまとまった研究がないまま放置されて来たのである。

例えば、島地大等博士の研究から創まる、今日までの天台

研究についてみても、趙宋天台学の成立背景に延寿教学が介在しているのではないか、という問題意識すら自覚されることはなかったのである。

このような研究状況のなかで、ただ一人、安藤俊雄博士だけが、鋭意、この問題にふれておられるのが注意される。安藤博士は『天台性具思想論』（昭和二八年初版、昭和四八年復刊、法蔵館）で、三頁（二六六―八頁）に及ぶ紙数を費やし、徳韶伝を考察した後に続けて、延寿の『宗鏡録』について論じている。そして、この一段を、

天台宗の義寂や山外派の晤恩が、大体、延寿と同時代の後輩であることをおもえば、当時の天台教学の傾向がいかなるものであったかを幾分推定できるであろう（二六八頁）。

と、示唆に富む文章で結んでいる。

安藤博士のこの著眼点は傾聴にあたいするものであり、それまでの天台の研究史を回顧してみても、披群の学説であることが知られるのである。この視点の一端は「観無量寿経疏妙宗鈔概論」（昭和四二年・真宗大谷派宗務所出版部刊・『天台学論集』昭和五〇年、平楽寺書店刊再録）のなかで次のような学説に展開されている。

もし義寂以外に義通と行靖二師の浄土学の系譜を求めようとするれば、どうしても義寂の当時、天台山の天柱峰に在って呉越王の帝師として名声の高かった法眼系の禅匠たる天台徳韶やその門

人、延寿との関係を明らかにする必要がある。（中略）延寿は宗鏡録百巻のなかに浄土教を論ずるのみならず、天台観経疏や天台十疑論をしばしば引用しているし、天台山の平田寺で天台観経疏を講じたという記録もある。しかるに義通は天福年間、高麗から天台山に来るや、先ず徳韶に謁して法眼禅を授けられ、後に義寂の許で天台学を修めた。行靖は延寿の許で出家し、次いで義寂に従って天台を学び、後に徳韶に参じたという。彼等の同学の澄或も、延寿を通じて天台十疑論に対する関心を抱くにいたったのではないかと推定される。この観点から考察するとき、義寂門下から知礼に及ぶ山家派の浄土学の系譜は、天台徳韶、とくに延寿の思想から源を発するものと考えることができる。（『天台学論集』二〇頁）

安藤学説は、趙宋天台浄土教の成立に関していわれたものであるが、本論ではもっと枠組を広げて、趙宋天台学が興起し成立するに至る諸条件を、延寿の教学のなかにさぐることはできないであろうか、と考えてみたのである。

果たせるかな、延寿の現存著書にあたってみると、おびただしい質量で天台の教義が引かれており、その一一を検討してみると、天台学が延寿教学に占める意義は軽視されてはならないものであることがわかる。そして、さらに延寿教学における天台学の特徴が解明されることによって、趙宋天台学の教理史的な課題とその論調の行くへが、趙宋天台学が興起する一つ前の時代において、延寿の前から後へとなめらかな

曲線を描いて展開していく過程が、より鮮明に浮び上がって  
くることが知られるであろう。

二 延寿の著述と引用例

『自行録』に記すところによれば、延寿は著述をなすこと  
を自らに課していたことが知られる。「毎日所行一百八件仏  
事」の最後に、

第一百八。常纂集製作祖教妙旨、宗鏡録等法施有情、乃至内外搜  
揚寄言教化、共六十一本総一百九十七卷。

とあり、続けて全著述の目録を記している。

- 1 宗鏡録 一部百卷（正蔵四八卷）  
『宗鏡録要義条目』自撰？  
『宗鏡録抄』志玄無極撰
- 2 万善同帰集 三卷（正蔵四八卷）
- 3 明宗論 一卷
- 4 華嚴宝印頌 三卷
- 5 論真心体訣 一卷
- 6 唯明訣 一卷
- 7 正因果論 一卷
- 8 坐禅六妙門 一卷
- 9 靈珠讚 一卷
- 10 坐禅儀軌 一卷
- 11 華嚴論要略 一卷
- 12 布金歌 一卷
- 13 警睡眠法 一卷
- 14 住心要箋 一卷
- 15 唯心頌 一卷
- 16 華嚴十玄門 一卷
- 17 華嚴六相義 一卷
- 18 無常偈 一卷
- 19 出家功德偈 一卷
- 20 定慧相資歌 一卷（統蔵二・一五・五）
- 21 施食文 一卷
- 22 文殊靈異記 一卷
- 23 大悲智願文 一卷
- 24 放生文 一卷
- 25 文殊礼讚文 一卷
- 26 羅漢礼讚文 一卷
- 27 華嚴礼讚文 一卷
- 28 警世文 一卷（統蔵二・一五・五）
- 29 発二百善心断二百悪心文 一卷
- 30 観音礼讚文 一卷
- 31 法華礼讚文 一卷
- 32 大悲礼讚文 一卷

- 33 仏頂礼讃文 一卷  
 34 般若礼讃文 一卷  
 35 西方礼讃文 一卷  
 36 普賢礼讃文 一卷  
 37 十大願文 一卷  
 38 高僧讃 三卷一千首  
 39 上堂語録 五卷  
 40 加持文 一卷  
 41 雜頌 一卷  
 42 詩讚 一卷  
 43 山居詩 一卷  
 44 愁賦 一卷  
 45 物外集 十卷五百首  
 46 吳越唱和詩 一卷  
 47 雜牋表 一卷  
 48 光明会応瑞詩 一卷  
 49 華嚴感通賦 一道  
 50 供養石橋羅漢一十会祥瑞詩 一卷  
 51 観音靈驗賦 一道  
 52 示衆警策 一卷  
 53 神栖安養賦 一道 (正蔵四七卷桑邦文類卷五所収)  
 54 心賦 一道七千五百字 (統蔵二・一六・一)

趙宋天台学の背景 (池田)

- 55 観心玄枢 三卷 (統蔵二・一九・五)  
 56 金剛証驗賦 一道

(民国十八年吳興氏永樂大典七千五百四十三景印)

- 57 法華靈瑞賦 一道  
 58 雜歌 一卷  
 59 勸受菩薩戒文 一卷  
 60 受菩薩戒儀 一卷 (統蔵二・一〇・一)  
 61 自行録 一卷 (統蔵二・一六・一)

以上は『自行録』に記す著述で、1・2・20・28・53・54・55・56・60・61の十本は現存する。さらに『自行録』以後のものとしては、

- 62 心性罪福因縁集 三卷 (統蔵二乙・二三・三)  
 63 心賦注 四卷 (統蔵二・一六・一)  
 64 唯心訣 一卷 (統蔵二・一五・五)  
 65 三支比量義鈔 一卷 (統蔵一・八七・一)  
 66 三時繫念仏事 一卷 (統蔵二乙・一・一)  
 67 三時繫念儀範 一卷 (統蔵二乙・一・一)  
 68 勸人念仏 一卷 (統蔵二乙・一・一)  
 69 念仏正因説 一卷 (統蔵二乙・一・一)  
 70 智覚禪師垂誠文 一卷 (正蔵四八・九九三b・c・文守註)

の九本が現存している。この外にも、後世になって延寿の著述のなかから摘出して一本の体裁にしたもので、玉峯が『万

善同帰集』から抄略してなった

71 永明禪師念仏訣 一卷（光緒一〇年刊）

や、明の智旭が『宗鏡録』のなかから摘出し略解を付した、

72 唐玄奘師真唯識量略解 一卷（統藏經一・八七・一）

が現存している。

これらの現存している延寿の全著述に当り調査した結果、

天台の教義に関して何らかの指摘がみられたり、天台学の要文を引用する例がある著述は、このなかでも『宗鏡録』『善同帰集』『註心賦』『心性罪福因縁集』『受菩薩戒法』の五書に限られることがわかった。

天台義の引用例の概略を未完であるが一覧しておきたい。

〔宗鏡録〕

卷	正蔵四卷頁・段・行	引 用 例	典 故	正蔵・卷・頁・段	備 考
一	四一八 a	故涅槃疏云涅槃宗本者……其宗得立	涅槃玄義	三八・一〇 a	
二	四二五 c	法華玄義云心法者……畢竟清淨	法華玄義	三三・六九六・a	
三	四三〇 a	止観云、若積金剛經……法門自在	摩訶止観	四六・八四 a b	
五	四四二 a	止観云、起一念慮知之心……俱非故双簡	摩訶止観	四六・四 a b	取意・鈔略
九	四四二 a	輔行記積一念心以成観境……	輔行伝弘決	四六・四二七 c	
	四六〇 b	浄名疏問云、玄義処処多明観心……	維摩經疏	統藏二七・五・四三七 a	
	四六一 b	台教云、心如幻化、但有名字……	法華玄義	三三・六八五 c	
	四六一 c	法華玄義云、絶待明妙者為四	法華玄義	三三・六九六 c   六九九 b	
	四六三 c	台教引仏藏經云、無名相中假名相説			
	四六四 a	金光明經疏云、如日光能照天下	金光明經玄義	三九・七 a	
一〇	四六四 b	止観云、発此心者……菩提即止観	摩訶止観	四六・九・a   一〇 a	取意・抄略
一一	四七三 a	天台頂尊者、涅槃疏云、般若者	涅槃玄義	三八・八 c	
	四七四 c	法華玄義云、一心五行即是三諦三昧	法華玄義	三三・七二五 c	
	四七五 a	金光明經疏云、如王子飼虎……	金光明經文句	三九・五五 c	
	四七六 c	台教云、心王即如来、心数即弟子			
	四七八 a	台教云、如地無差別草木若干	維摩經疏	統藏二八・一・三〇 c d	抄略

一二	四八一b	輔行記、問云、一心既具十法界因果	輔行伝弘決	四六・二八九c	取意・抄略
一三	四八七b	金光明經疏云、法性身仏者……唯心度者	金光明經文句	三九・四九a・六五a b	
一四	四九〇c	台教云、只觀十法界衆生即是仏	金剛鉅論	四六・七八一a	取意
	四九二c	先徳云……所以云阿鼻依正常外極聖云自心	法華玄義外	三三・七六四b	取意
一五	四九四c	台教多約本迹	積載	三三・九一八b   九一九c	
	四九四c	湛然尊者、約三觀四教十如十乘一念三千等	輔行伝弘決		
	四九七a	輔行記云、修三昧者忽發神通	摩訶止觀		
	四九七a	止觀云、能障般若	摩訶止觀	四六・八三a	
一六	四九九b	台教問云、無明即法性無復無明	維摩玄疏	統藏二七・五・四〇〇c	取意か
	五〇〇a	天台明四教仏	摩訶止觀	四六・一二bc	
一七	五〇六b	止觀明、念仏三昧門者、当云何念	摩訶止觀	三四・八八二c   三	
	五〇七b	台教問、闡提与仏、断何等善惡	觀音玄義	統藏二七・五・四七一d	
一八	五一一a	天台浄名疏云、衆生氣類無量無辺	維摩經疏	三七・一八七a	
	五一四b	古徳釈台教止觀云、只達一念自心是法界	觀經疏		
一九	五一九b	台教云、仏者覚義如宝篋經云			
	五二一a	玄義格云、人謂善財龍女是法身菩薩	摩訶止觀	四六・一一c・一二a	
	五二一a	亦同天台初発心時即觀涅槃行道	摩訶止觀	四六・一c   二a	
	五二二c	止觀云、觀衆生相如諸仏相	維摩經疏	統藏二八・二・一八三d	
二〇	五二六a	先徳云、法性寂然名止、寂而常照名觀	金光明經文句	三九・五〇c	抄略
	五二七a	天台浄名疏釈、不觀色不觀色	金光明經文句	三九・五〇b	抄略
二一	五二八c	台教云此五戒亦是大乘法門	觀經疏	三七・一八六bc	
	五二八c	天台金光明經疏云、五戒者、天地之大忌	維摩玄疏	統藏二七・五・四二六a	
	五三二b	天台無量壽疏云、夫樂邦之与苦域	輔行伝弘決	四六・一八四bc	抄略
二二	五三三a	天台浄名疏云、随成就衆生則仏土浄	法華文句	三四・二二c	
	五三六b	台教云、如無行經云、五逆即菩提			
二三	五四一b	台教云、供養仏者、只是随順仏語			
	五四四b	玄義格云、円教四十二位同一真理			

五四四 b

止観云入仏正宗免墮邪倒

摩訶止観

五四四 b

台教云若人宿植深厚或值善知識

法華玄義

三三・七三三 a

五四四 c

台教接人止住於此邇後直至十行

摩訶止観

四六・五二 b | 三 a

五四四 c | 五四五 a

又広釈不可思議境者、如華嚴經頌云

摩訶止観

四六・五二 b | 三 a

五四六 a

天台云、四教如空中四点

止観大意

四六・四六〇 a

五四六 b

台教約中下之根備歴十乘観法

法華玄義

三三・七八九 c | 七九〇 b

五四七 b

玄義格云、真仏者從初発心即体一真法界

法華玄義

三三・七八九 c | 七九〇 b

五四九 b

浄名疏云、定自在王菩薩者

維摩経疏

続蔵二七・五・四五六 c |

五五〇 c

台教云、観一念心浄若虚空

維摩経疏

続蔵二七・五・四五六 c |

五五〇 c

浄名疏云、於法等者於食亦等、如大品経

維摩経疏

続蔵二八・一・四七 a |

五五二 b

涅槃疏云、放光照文殊者見色知心

涅槃経疏

続蔵二八・一・四七 a |

五五七 a

天台疏云、以須弥之高広内芥子中

輔行伝弘決

続蔵二八・一・四七 a |

五五七 b

輔行記釈云、且約一念刹那心所起

輔行伝弘決

続蔵二八・一・四七 a |

五六二 b

止観云、戒急乘緩者

摩訶止観

四六・三九 b

五六七 a

台教云、観於一心欸有一切心

摩訶止観

四六・三九 b

五六九 b

台教所明法華三昧者即是四一

摩訶止観

四六・三九 b

五七〇 a

台教云、若観如来蔵心地法門

摩訶止観

四六・三九 b

五七二 b

天台涅槃疏云、如是正業不可言三

涅槃経疏

四六・三一 b | 三二 a

五八一 b

止観云、観心攝一切教者

摩訶止観

四六・三一 b | 三二 a

五八六 c

輔行記云、若以權法化人法門雖開不名傾蔵

輔行伝弘決

四六・五八四 a | 五八六 a

五八七 b

涅槃疏云、若言心性本浄為惑所覆

涅槃経疏

四六・五八四 a | 五八六 a

五八八 b

文句疏云、若尋教迹迹広徒自疲勞

法華文句

四六・五八四 a | 五八六 a

五八九 c

智者観心論偈云

観心論

五八六 a | 七 a

五九一 a

釈曰、止観心三十六問

観心論疏

四六・五八九 b | c

五九〇 a 五九一 c

抄略

抄略

三〇	五九二b 五九二c 五九二c	台教問、何意不断煩惱而入涅槃 台教云、諸仏解脱於衆生心中求者 金光明經疏云、毘盧遮那遍一切処 天台淨名疏問那忽処对法門	維摩經疏 金光明經文句	三九・五九c 統藏二七・五・四四三a	抄略
三三	六〇〇a 六〇〇c 六〇五b	天台淨名疏云、住此觀心不見慳相施相 台教云、如鏡有像瓦礫不現中具諸相 華嚴如高山、說方等如食時說般若如禺中 止觀釈云、一切衆生心性正因譬之如乳	維摩經疏 摩訶止觀	四六・四一c・四二a 四六・三三b	抄略
三五	六一八a 六一八b 六一八b 六一九c	天台立四教乃至八教 天台四教者、一藏教、 淨名疏云、今但論即心行用 約頓漸不定秘密通前四教總立八教 輔行記引華嚴經頌云、諸仏悉了知 法華玄義云、約五味半滿相成者	摩訶止觀	四六・三三b	
三六	六二〇a 六二〇b 六二〇c 六二一a 六二一a 六二一b 六二一c 六二四c 六二六a 六二七a	天台教立三觀 台教三觀者、三觀義云、夫三寸之管氣序不衰 天台疏問曰、三觀俱照二諦 輔行記問云、四句推檢、貧欲泯然 台教明、修無作三昧觀真如実相、 即天台智者意、彼云漸漸非円漸	維摩玄疏 輔行伝弘決 法華玄義 (指示)	統藏二七・五・四〇九a 三三・八〇九a 三三・八〇九a 統藏二・四・一・三七d 統藏二・四・一・三八d 四六・二〇八a 三八・五二八b 三三・六八三c	演義鈔(正 藏三六・一 六四c)引 用
三七	六三〇c 六三一c 六三二c 六三二c 六三三a	若約天台、即言直縁中道名一切智 法華玄義云、歴法明經者、 六即之位此出台教止觀正文 止觀云、約六即頭是者、問初心是後心是 古徳約四教明六即者	法華玄義 摩訶止觀 摩訶止觀	三三・七七六c 四六・一〇b 四六・一〇b	





七八	七三七 a 七四九 a 七四九 b	觀心等論云、若得自在諸根互用、 止觀云、若一念煩惱心起具十法界百法 淨名疏云、但除其病、不除其法者	觀心論 摩訶止觀 維摩經疏 摩訶止觀	四六・五八四 b   四六・一〇四 a 統藏二八・二・二二〇 d   四六・二九 a	趣意か 抄略
六一	七六三 c 七六五 b 七六五 b	止觀云、若言智由心生自能照 台教云、夫一向無生觀人、但信心益 法華玄義問云、衆生機、聖人応、為一為異、 台教云諸物中一切皆有可転之理	法華玄義 涅槃經疏	三三・七四七 b	
六二	七七〇 a	台教云諸物中一切皆有可転之理	涅槃經疏	三八・一五六 c	
六五	七八〇 b 七八一 a 七八一 c	台教云、初入証道、修道忽謝 若約教、天台文句疏配円教四位 法華玄義云、夫正体玄絶一往難知、 台教約四教四証三接	法華文句 法華玄義 法華玄義 法華玄義	三四・五一 b 三三・七八〇 a   七八二 b 三三・七〇二 b   七〇四 c 三三・七〇二 b	
六七	七九五 b 七九五 b	法華玄義云、夫経論異説悉是如来善權方便 法華玄義広积本迹為六本	法華玄義 法華玄義	三三・七〇二 b   三三・七六四 b c	
七〇	八〇八 a b 八二七 b 八三七 b	台教云、此身無常、攬寿煖識二事而有身 依台教、略有九種五陰	維摩經疏 摩訶止觀	統藏二八・一・一九 a 四六・五二 a	抄略
七六	八三七 c 八三七 c 八三九 c 八三九 c	輔行記云、若示不思議境界、觀心即足 四念処觀云、非但唯識、亦乃唯色唯声等 今約台教、一心具無作四諦者 止觀云、法性与一切法無二無別	輔行伝弘決 四念処 摩訶止觀 法華玄義	四六・二九一 a 四六・五七八 c 四六・六 a b 三三・七〇一 b	
七七	八三九 c 八四〇 b	玄義云、以迷理故菩提是煩惱名集諦 輔行記云、十二因縁、華嚴大集等経皆云一念 心具	輔行伝弘決	四六・四二七 b	
八〇	八四〇 b 八四二 a 八五八 a 八六一 c 八六二 a	止觀亦云、縁生正一念心、 湛然尊者云、不見色相是行支滅 涅槃疏云、涅槃正性有五、 台教約五品、初位中、以凡夫心同仏所知 止觀釈云、了了分明見者彼是九法界眼根也	摩訶止觀 涅槃玄義 (指示) 摩訶止觀	四六・一二七 a 三八・九 b 四六・九五 b	取意 取意

八一	八六二c 八六四b 八六六a	台教云、若人欲得一切：一行三昧、繫緣法界 止觀云、發真正菩提心者、 淨名疏中、觀心釈四種境界者、	摩訶止觀 摩訶止觀 維摩經疏	四六・一二a・一一b 四六・五五c	抄略
八二	八六六b 八六七b 八六七c 八六八c 八六八c	若台教総論二種止觀、一相待止觀二絶待止觀 輔行記云、若無生門千万重覺唯一心者 湛然尊者云、上根唯觀一法謂觀不思議境 涅槃疏云、仏性如世間道、有未行者	摩訶止觀 輔行伝弘決 止觀大意 涅槃疏	四六・二一b 四六・三五五a 四六・四六〇・a	取意
八四	八七七c 八七八b 八八六a 八八七a 八八七c	台教云、六識是縁因種、善惡並是六識起 止觀広破、四句檢而不得、横堅推而無生 輔行記釈、因成仮、初破自生中云 台教釈法華經十法界十如因果之法 台教云、於諸法門文義教海 台教明双亡正入常冥中道	維摩經疏 摩訶止觀 輔行伝弘決 摩訶止觀	統蔵二八・二・一五六a 四六・六二a・六三c六四a 四六・三一八c―三一九a 四六・五二c・五三a b	抄略 抄略 抄略
八六	八八七a 八八七c	今約天台四教、藏通別円各有四門入道 止觀云、円教四門妙理頓説	四教義 摩訶止觀	四六・七二九a b・七六〇a 四六・七五a	取意
八七	八九一a 八九二a 八九六a 八九七a	淨名疏云、仏法如城、能為行人防非擬敵 台教釈法華經分別功德品、依円教立五品位 台教云、大機扣仏譬忍辱草	維摩經疏 法華文句 法華玄義	統蔵二七・五・四四七b 三四・一三八a 三三・八〇七a b	抄略 取意
八八	八九九a 九〇二c 九〇三a 九〇四c	台教有六即之文、仁王具五忍之位、 法華疏釈如来寿量品云寿者受也 台教云、仏国有四、一染淨国凡聖同居 台教云、無明為父、貪愛為母、六根為男	法華文句 維摩經疏	三四・一二八b 統蔵二七・五・四三二b	取意
八九	九〇六b 九〇六c―九〇九a 九〇九c 九一六c 九一七b	台教類通三軌法、 今引金光玄義觀心広釈十種三法門者 止觀指帰者、大涅槃經云、安置諸子秘密蔵中 台教釈云、此経具指四菩提心 台教云、若仏心中所觀十界十如皆無上相	法華玄義 金光明玄義 摩訶止觀 法華文句	三三・七四二a b 三九・七a―九c 四六・二〇c 三四・四三b	抄略 抄略

一〇〇	九五四 c	台教云、手不執卷常誦是經	法華玄義	三三・七七七 c	
九九	九五二 b	智者大師与陳宣帝書云、夫学道之法	現存しない		
九八	九五二 b	天台涅槃疏云、煩惱与身一時者	涅槃經疏	三八・二二五 c 二二六 a	
九四	九五二 b	天台無量寿仏疏云、就一字說者、釈論云	觀經疏	三七・一八六 c	
九四	九四九 c	六妙門云、此為大根人善識法要	六妙門	四六・五五三 c	
九四	九四九 c	南岳思大和尚偈云、頓悟心原開寶藏(異本)			
九四	九四九 c	涅槃疏云、涅槃之義浩然無尽	涅槃經疏	三八・四二 b	
九四	九四九 c	觀心論中云、復以傷念一家門徒隨逐積年	觀心論	四六・五八六 a	
九四	九四九 c	止觀中云、究竟指歸何処言語道斷	摩訶止觀	四六・三 b・五 b	
九四	九四九 c	智者大師一生弘教雖広垂開示唯顯正宗	(指示)		
九四	九四九 c	台教云、若一切法權何所不破			取意

〔万善同歸集〕

上	正藏四八卷九六一 b	止觀云、円教初心理觀雖諦法忍未成	摩訶止觀	四六・九八 a	取意
上	九六一 b	天台智者問云世間有空行人執其癡空			
上	九六一 c	智者大師云、夫一向無生觀人、但信心益			
上	九六二 c	台教云疑者言、大乘平等何相可論			
上	九六三 c	台教行四種三昧、小乘具五觀对治			
上	九六三 c	南岳法華懺云修習諸禪定得諸仏三昧	法華安樂行義	四六・六九八 a	
上	九六三 c	是以智者修法華懺、誦至藥王焚身品云	別伝	五〇・一九一 c	
上	九六四 a	法華懺云有二種修、一事中修……二理中修	法華懺法	四六・九五〇 a	
上	九六四 c	法華懺云、当礼拜時雖不得能礼所礼	法華懺法	四六・九五〇 b・九五一 b c	取意
上	九六五 c	思大禪師行方等懺夢梵僧四十九人	唐伝	五〇・五六二 c	
上	九六五 c	智者大師於大蘇山修法華懺証施陀羅尼弁	唐伝	五〇・一九二 a	
上	九六五 c	高僧慧成学窮三藏被思大禪師訶曰	唐伝	五〇・五五七 a	
上	九六五 c	思大禪師行方等、而了見三生	唐伝	五〇・五六二 c	
上	九六五 c	智者証旋陀羅尼弁	別伝	五〇・一九二 a	

下					
九八九c		法華玄義四句料簡、一冥機冥心	法華玄義	三三・七四八b	
九八四b		台教云、如大乘師不弘小教、則失仏方便			
九七六c		台教云、惡是善資、無惡亦無善			
九七六a		荆溪尊者云、一毫之善本趣菩提			
九七六a		又云、善機有二、一感人天華報二感仏道果報			
九七五a		台教云、如輕小善不成仏、是滅世間仏種			
九七四b		台教初品即是凡夫、若信入門門亦可說法	法華玄義	三三・七一五a	
九七三b		古德釈云、禪宗失意之徒、執理迷事云性本具足	摩訶止観	四六・一〇b	
九七三b		台教云、如鏡有像瓦礫不現中具諸相	摩訶止観	四六・四一c	
九七二b		智者備六即之文、行位分明豈可叨濫	別伝	五〇・一九七c	
九七一b		天台宗滿禪師一生講誦蓮經感神人現身	法華文句記	三四・三五四c	取意
九七〇b			別伝	五〇・一九六a	
九六八b			法華安樂行義	四六・七〇〇a b	
九六六b					
九六六a					

〔註心賦〕

一					
二	統藏二・一九・五冊二d	止観云譬如良医有一秘方総撰諸方 天台浄名疏云、一法異名者諸経異名 観音玄義云、地獄界具十如性相体力 牛頭第一祖融大師天台智者大師……観心釈 台教問云、無明即法性無復無明与誰相即 台教立無生一法為破一切法遍 台教四土祇是一自性清浄心	摩訶止観 維摩玄疏 観音玄義 (指示)	四六・九bc 統藏二七・五・四二四b 三四・八八八c	宗(一六)同 取意
三d					
五d					
一四c					
二六c					
三一d					
三四b				四六・六二a	

		四	三
		六九 a 六七 d 六五 a 六四 a 六四 a 四七 b 四五 c 四四 b	三六 c 四一 a 四一 b 四一 d 四三 c 四四 b 四四 b 四七 b 四五 c 四四 b
		台教云、十法界三科十八界如丈 台教云、八千声聞於法華会上見如来性 古教云止觀無所現有三義者一無心現約止 古積云此三德不離一如德用分異 台教類通三軌法	南嶽思大和尚云、若學者先須通心 台教云識得海水真性即是毛孔真性 台教云、表菩薩四位 八藏者（漸・頓・不定・秘密・藏・通・別・円） 台教云破塵出卷首、恒沙法門、一心中曉、 台教云如過去有仏号住無住 六妙門云、此為大根人善識法要、不由次第 台教於一心說三軌 古德云此三德不離一如德用分異 台教類通三軌法
		摩訶止觀 法華玄義	六妙門 金光明玄義
		四六・五二 a・二九一 b 三三・七四二 a b	四六・五五三 c 三九・七 c
		抄略	取意

〔罪福因縁〕

下	上
二二七 d 二二三 c 二二三 d 二二三 c	統藏二乙・二二・三冊 二二三 c 二二三 d 二二三 c 二二三 d
智顛禪師臨命終時謙自位言領衆太早	順彼天台円頓念仏一称仏名一念仏徳 欲念仏時依彼広文止觀等之意細檢心観 依天台智者禪師、三観一心相統観法 智顛禪師臨命終時謙自位言領衆太早
別伝・統伝	摩訶止観 (指示)
五〇・一九六 b・五六七 b	四六・一二 b
取意	取意

〔受菩薩戒法〕

一一 a	統藏二・一〇・一冊・	天台教云、以八教網、撈人天魚、有頓有漸	法華文句記	三四・一六〇 b	取意
------	------------	---------------------	-------	----------	----

三 延寿の天台学

前節の一覧表から明らかかなように、延寿が引用する天台教義は、質量共に無視できないほどのものであることが知られる。『摩訶止観』『輔行伝弘決』『法華玄義』『釈懺』『法華文句』

『記』などの引用例でみられるように、天台三大部を中心に、天台典籍のかなり広範な引用がみられる。著者でみると、天台智顛・荆溪湛然・章安灌頂・南岳慧思の著書である。そこで、延寿が引用する天台典籍と引用頻度について、整理すると次のようになる。

	宗鏡録	万善同帰	註心賦	罪福因縁	受菩薩戒法
摩訶止観	三九		四		
輔行伝弘決	一五			一	
止観大意	二				
六妙門	一				
四念処	三				
三観義	二				
四教義	一				
観心論	三		一		
観心論疏	一				
法華玄義	二	二			
釈 鐵	一				
法華文句	八	一			
文句記	一				
浄名玄疏・経疏	二				
金光明玄義・疏	七				
観音玄義	一				

合計	一八五	三三二	二〇〇	四	一
法華鐵法 觀經疏 涅槃玄義・經疏 金剛鉾 法華安樂行義 智者与宣帝 南岳思大和尚 智者大師別伝 台教・天台ほか	四〇 一〇 一 一 一 一	一六 五 二 二	一〇 一 一	二 一	

延寿の天台学について問題点を重点的に指摘したい。

第一に、『宗鏡録』巻九〇に引用する、『金光明玄義』は、略本ではなく広本によっていることが知られる。

『金光明玄義』は、前後四〇年に及ぶ山家山外の大論争を展開する問題の書であるが、後に、知礼は『釈難扶宗記』を著わし、広本の正統性を弁証した。

延寿は、広本にもとづく「観心积名」の段の説を評価し、  
 1 三道、2 三識、3 三仏性、4 三般若、5 三菩提、6 三大乗、  
 7 三身、8 三涅槃、9 三宝、10 三徳からなる十種三法に約して、「金・光・明」の経題を観心について解釈する問題の長文（正蔵三九卷七頁上〜九頁下）をそっくり収録するのである。

このように、延寿が天台の観心釈に深い関心をよせ、「観

心积名」がある広本の『金光明玄義』を引用することは、後に生ずる広・略二本のいずれが善本であるか、という山家山外の論争の前段階における資料として見のがすわけにいかず、さらには知礼の広本正統説が成立する条件を、延寿のこの引用例は示唆しているように思われる。

延寿の天台の観心主義に対する一貫して変わらぬ評価は、『摩訶止観』や『輔行伝弘決』の引用頻度に現われ、さらには『六妙門』『四念処』『三観義』『観心論』などの引用になったことが知られる。

例えば『観心論』は、『宗鏡録』巻三〇でほとんど全文を引用しているほどで、又引用した一一の偈文について、灌頂の『観心論疏』によって解釈するという形式をとっている。



延寿が天台の『観心論』を評価し、灌頂の『疏』釈に権威を認めている点は注意すべきことであり、延寿自らも『観心玄枢』の著述をなし、彼の教禅一致の立場を論じていることと合せて注意されてよい。

『六妙門』の引用は、『宗鏡録』巻九九と『註心賦』巻三に同文を引用するが、この文は「観心六妙門」の帽頭に出る次のような文である。

観心六妙門者、此為大根性行人善識法惡（『宗鏡録』は「要」）、不<sub>レ</sub>由<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>、懸<sub>三</sub>照諸法之源<sub>一</sub>、何等為<sub>三</sub>諸法之源<sub>一</sub>、所謂衆生心也。一切方法由<sub>レ</sub>心而起、若能反<sub>三</sub>觀心性<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>心源<sub>一</sub>、即知方法皆無<sub>二</sub>根本<sub>一</sub>。

『自行録』には、延寿に『坐禪六妙門』一巻の著述があったことを記すから、この著書は恐らく、天台の『六妙門』を前提とする内容のものであったと推察できるが、それを徴する資料はない。ともあれ、延寿の天台止観に対する研究が並みのものでなかったことは知られるであろう。

次に、『宗鏡録』巻一五に引用する『釈籤』の引用文は、次のようなものである。

天台教、多約<sub>二</sub>本迹<sub>一</sub>、明<sub>三</sub>凡聖不二<sub>一</sub>、弁<sub>三</sub>生仏之因果<sub>一</sub>、故肇法師云、本迹雖<sub>レ</sub>殊不思議<sub>一</sub>。所以湛然尊者、約<sub>三</sub>三觀<sub>一</sub>、四教、十如、十乘、一念三千等、於<sub>二</sub>此迹門<sub>一</sub>、論<sub>三</sub>其十妙<sub>一</sub>。若知<sub>二</sub>迹門尚妙<sub>一</sub>、本門可<sub>レ</sub>知。遂撮<sub>二</sub>略色心不二等十門<sub>一</sub>、明<sub>三</sub>權實之宗<sub>一</sub>、弁<sub>三</sub>能所之化<sub>一</sub>。故云、為<sub>レ</sub>實施<sub>レ</sub>權則不二而二、開<sub>レ</sub>權顯<sub>レ</sub>實、則二而不二。斯則始終明<sub>二</sub>

不二。十門者、一色心不二門（以下略）

というようにして、以下に2内外不二門、3修性不二門、4因果不二門、5染淨不二門、6依正不二門、7自他不二門、8三業不二門、9權實不二門、10受潤不二門のそれぞれを引いている。延寿が引く『釈籤』のこの段は、改めていうまでもなく、『十不二門』として、単独に研究された歴史をもち、『十不二門』の研究が盛行することは趙宋天台学の特質を象徴するものであるといえる。

例えば、義寂伝には、義寂に『止観義例』と『十不二門』に関する著述があったことを記している。義寂は、延寿より十六歳後輩であったが、延寿の『宗鏡録』のなかに「十不二門」の全文が引用されていることは、もっと注意してよいと思う。

想像を出ないが、延寿は『釈籤』と指示して引用しているのではないから、あるいは当時、離出別行本として盛んに研究されるようになった『十不二門』（正蔵四六卷）そのものの説をこのように引用したのであるかも知れない。

ともかく、これら延寿や義寂などの研究と呼応するようにして、源清の『示珠指』（九八六）や、宗昱の『注』（九九八）が著わされるわけであり、知礼の『指要鈔』（二〇〇四）の成立にいたって源清や宗昱の解釈が批判され、天台の正統教義の発揚が叫ばれるわけである。

次に、『宗鏡録』卷一七に、

台教問、闡提与レ仏、断ニ何等善惡。

と引用するのは、『観音玄義』の文である。『観音玄義』のこの箇所は、『輔行伝弘決』（正蔵四六卷二九六頁上中）において取意の抄文を引用するが、彼此を対照すればわかることであるが、延寿の引用は確かに『観音玄義』からの直接の引用である。

この一段の文は、後に知礼によって重視され、天台学の根本とみなされる性具性惡説の証拠として強調されていく。この点からみると、延寿においては、知礼のように、性起と性具の教学の差異を示す要文として意識されているわけではないのであるが、それでもなお、天台の性惡説に注目した延寿の視点は注意されよう。恐らくこのことは、延寿の禅淨双修説の契機に関わる問題として重要である。

次に、『摩訶止観』の引用は、頻度が高いだけでなく延寿の評価が並みなみならぬものであったことが知られる。

例えば、『宗鏡録』卷二三（五四四c～五四五a）に、十乘観法の第一の「不可思議境」を引用し、一念三千を説いて「所以稱為不可思議境、意在於此」と結ぶ一段の要文を抄録した後で、延寿は、

既自了達一心不思議境、遂起同体大悲、発真正菩提心、以下九種観門成熟。

趙宋天台学の背景（池田）

と解している。この理解は、後段（五四六b）に、

台教約中下之根、備歴十乘観法、然雖具十不離二門。

と結ぶ文と関わり、一応不思議境に了達するものは「上上根人」であることが知られる。

十乘観法を上・中・下根に分けて解することについては、『宗鏡録』卷八二で引用例があり、湛然の解釈法であることが知られる。延寿は、

是以湛然尊者云、上根唯一法、謂観不思議境、境為所観、観為能観、所観者、謂陰界入、不出色心、色従心造、全体是心。

と引用するのであるが、これは湛然の『止観大意』からの引用である。

『止観大意』（正蔵四六卷四六〇上）には、

正観者何、所謂十法、若無此十、名壞驢車、又此十法雖俱円常円、人復有三根不等、上根唯一法、中根二或七、下根方具十、上根一法者、謂観不思議境。

とあり、延寿がこの湛然の説を承けたことは後に「頌云」（八六八頁上）として引く一段の文が『止観大意』からの引用であることによっても明らかである。

湛然のこのような理解が、南宗頓悟禅の主張に対抗して成立したものであることは推測できるのであるが、延寿が湛然教学を介して『摩訶止観』を読み、

故此妙境為諸法本、故此妙観為諸行原、上根一観、横豎該攝、

便識無相、衆相宛然、若中下根、不逗此門、則隨機差別、教分多種。雖說種種道、其實為仏乘、仏乘不動、種種隨心、猶玻璃珠隨前塵而變衆色、若金剛宝置日中而無定形。

と肯うことは注意すべきである。

このような例から知られるように、延寿が湛然教学に權威を認め、湛然を介して天台止観を理解する方法は、知礼教学に正しく継承されていく。知礼の妄心觀境説や、『釈輔行伝弘決題下注文』『止観義例境智互照』などにおける天台止観の研究動向も、このような先行する研究と深く関係していたことが知られる。

その点で、『宗鏡録』卷一八（五一―四頁中）に、

又古徳天台教止観云、只達一念自心是法界、十方諸仏与一切衆生、同一無住、本一法界、為身為土、無彼無此、無根無住処、無修不修、無証不証、無凡無聖、但衆生自謂妄想纏縛為凡、為不修為不証、謂仏為聖、為修為証、修証凡聖、在衆生自強立之、仏位中都無此名也（以下略）

と記し、その後の問答のなかで次のように説いている。

問、若爾只共作一仏、不能各各自成也。答不共作一仏、不各各自成此義難了、試拳喻看、如国清寺法界也、住寺僧古仏也、遠人暫遊暫感仏也、他日愛慕剃髮配寺、国清即我寺也、五峯松径台殿房廊悉我有也、頓得受用、不滅他物成我家也、不人人別造一寺也、不共他分一寺也、分即隨人去、常住法界不可分也。

天台止観が天台山国清寺において講ぜられ、それも極めて日

常的な話題で提唱されていたことが知られよう。

#### 四 結

前述してきた第二の問題の外に、延寿教学の基礎をなしていると考えられる禅宗学と華嚴学、それに加えて法相学の研究などを含む延寿教学の全体像のなかで、このような延寿の天台学がどのような意義をもつのか、という第一の最も大きな問題は残されたままである。

また、趙宋天台学との関わりという第二の問題の枠組に限定してみても、延寿の『起信論』『永嘉集』傳大士などのおびただしい引用例とそれらの趙宋天台学との関係については完全に考慮の外におかれた。

本論はこのように未整理で充分なものではないが、天台教学史における延寿教学の重要性という当面の課題については、いささかの問題を論及できたと思う。

前述のように、延寿の天台学は極めて重要な、豊かな内容のものであり、趙宋天台の胎動期における仏教研究の一類型であることは事実であらう。

殊に、趙宋天台を代表する知礼教学の成立という観点からみても、延寿教学は確かな手応えのある位置を占めていることが知られたのである。

ここに例えば行靖（生卒年不明）という人物がある。彼は銭

塘の人であるが、『観経疏記』（現存しない）『永嘉集註』一卷（会出蔵三三・七）を著わした天台学者である。彼は「延寿」について出家し、「義寂」に従って学法し、「徳韶」に参じて見知り、石壁に在って講説を事とすること五十年に及んだという。

徳韶と延寿と義寂における緊密な人間関係は、行靖のこのような修学過程によって象徴されるであろう。その意味で、延寿を単に法眼宗という禅宗史上の一人物となし、延寿の教学の重要性についてかえりみるものがなかった、これまでの天台研究の手法は反省を要するように思われる。

#### 註記

延寿の伝記については、畑中浄円「呉越の仏教―特に天台徳韶とその嗣永明延寿について―」（大谷大学研究年報七集・昭和二九年）が詳しい。石井修道「永明延寿伝―法眼宗三祖と蓮社七祖―」（駒沢大学大学院仏教学研究年報三号・昭和四四年）、森江俊孝「延寿教学の基礎的研究序説（上）―永明延寿の生涯について―」（駒沢大学大学院仏教学研究年報八号、昭和四九年）同「延寿と天台徳韶の相見について」（印仏研究二二三巻二号・昭和五〇年）がある。又、当時の時代背景については、小川貫弑「錢氏呉越国の仏教について」（龍谷史壇一八号・昭和一年）、阿部肇一「呉越忠懿王の仏教策に関する一考察」（駒沢史学二号・昭和二八年）、牧田諦亮『中国近世仏教史研究』（昭和三二年・平楽寺）「贊寧とその時代」などの研究がある。

#### 趙宋天台学の背景（池田）

延寿の浄土教に関しては、望月信亨『中国浄土教理史』（昭和一七・三九年・法蔵館）「永明延寿の禅淨雙修論」、小笠原宣秀『中国近世浄土教史の研究』（昭和三八年・百華苑）、池田英淳「永明延寿の思想」（浄土学一四号・昭和一四年）、「永明延寿の浄土思想」（印仏研究一四巻二号・昭和四一年）、柴田泰「宋代浄土教の一断面」（印仏研究一三巻二号・昭和四〇年）、中山正晃「永明延寿の教学とその実践」（龍谷史壇五三号・昭和三九年）などの研究がある。

延寿の華嚴学に関しては、石井修道「宗鏡録におよぼした澄観の著作の影響について―永明延寿の教禅一致説成立過程の疑問―」（印仏研究一七巻二号・昭和四四年）がある。

延寿の天台学に関する研究としては、森江俊孝「宋代における台禅交渉史研究序説」（曹洞宗研究員生研究紀要七号・昭和五〇年・曹洞宗宗務庁刊）同「台禅交渉史研究序説」（同八号・昭和五一年）があり、この問題意識の下で、次のような森江氏の一連の研究があり注目される。森江俊孝「新出資料・逸文『観心玄枢』の研究」（同紀要九号・昭和五二年）、同「『観心玄枢』の研究（二）」（同一三号・昭和五六年）、同「『心賦』と『註心賦』について」（同一一号・昭和五四年）、同「『宗鏡録』と『註心賦』について」（同一二号・昭和五五年）、同「『宗鏡録』と『観心玄枢』について」（印仏研究二七巻二号・昭和五四年）などの研究がある。

外に、妻木直良「永明延寿禅師の警世講話」（警世一〇・一・明治四五年）、春日礼智「西湖の寺院と浄土教」（日華仏教研究年報第二年）などの関係論文があり、村中祐生「天台宗と法眼宗」（天台学報二二号・昭和五五年）の研究が注目される。